



Title	デンマーク人建築家カイ・フィスカの建築作品における造形的特徴について
Author(s)	倉前, 信江
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56289
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク人建築家カイ・フィスカの建築作品における造形的特徴について 倉前信江／大阪工業大学大学院工学研究科建築学専攻 博士後期課程

1. はじめに

北欧における建築の近代化は、西欧中心国のように、過去の様式からの分離が意図的に行われ、モダニズム建築へと一気に歩が進められたのとは異なる経路を辿ることとなる。北欧では、19世紀末に民族や国民国家などのアイデンティティを意識したローカリズムの主張であったと考えられる芸術運動であるナショナル・ロマンティシズムが起り、さらにその後、北欧新古典主義と呼ばれる建築潮流が北欧を席捲する。北欧の近代建築の形成過程におけるこのような特異な過程を理解することなしに、北欧近代建築を正しく捕捉することは困難であると考えられる。

本論考は、デンマーク人建築家カイ・フィスカ [Kay Fisker, 1893-1965] の建築作品における造形的特徴を明らかにすることを目的としているが、加えてデンマークにおける近代建築の成立過程及びデンマーク近代建築の特殊性に関する研究の一環をなすものである。フィスカが1925年のパリ万国博覧会でデンマーク館を担当した赤煉瓦による作品はル・コルビュジエのエスプリ・ヌーヴォー館に比肩する作品としての評価を受けることとなる。フィスカの設計活動は1915年以降1968年に至るまで約50年にわたり、それ故彼の作品は、デンマークにおける近代建築の成立過程とその後の展開を考察する上で相応しい対象であると考えられる。なお、本稿の考察では、『インターナショナル・スタイル』¹で定義された「三つの原理」から導出した三指標を基軸に据え²、真正と目される近代建築とフィスカの作品の造形的特徴の関係性につ

いて論究する。

『インターナショナル・スタイル』の三つの原理とは、「ヴォリュームとしての建築」「規則性」「装飾付加の忌避」である。この三つの原理は、骨組み構造を前提とした建築作品を対象としているが本研究で考察対象とした37作品のほとんどは煉瓦造のため、この原理をそのまま指標に用いることは有効ではないと判断し、「三つの原理」を帰着点とし、そこへと至るプロセスとして定位可能な造形的特徴を導き出し、考察の指標とした。すなわち、本研究における分類指標は、「指標1：平滑な連続的の壁面」、「指標2：同一開口部の単純な反復」、「指標3：装飾付加の忌避」³である。

2. 平滑な連続的の壁面

指標に合致した作品は全体の二割程度(21.6%)に留まったものの、それぞれの面に平滑性が確認できた、指標に準じた特性⁴を有する15作品を加えると、全体の5割(21作品/56.76%)の作品に平滑な連続的の壁面への指向がうかがえた。指標に該当しなかった14作品については、その半数に壁面自体への操が見られたものの、その一方で、平滑な壁面上に異要素としてのバルコニーなどが付加されている作品も見出せた。すなわち、カイ・フィスカの作品については、純粋幾何学形態という部分では指標に合致しないものの、壁面の平滑さへの指向は確認できた。

3. 同一開口部の単純な反復

「同一開口部の単純な反復」という指標に

該当した作品は、全体の3割以下（10作品／27.0％）に留まったが、複数の開口部形状が用いられてはいるものの、それらが群化され、さらには群化された開口部列が規則性をもって反復されていた作品が11作品に上った⁵。すなわち両者を併せると作品数は21作品となり、全体の過半（56.76％）を占める作品において単純な反復への指向が確認できた。また、該当しなかった作品についても、異形状の開口部を用いながら、配置の高さを合わせる、同形状の開口部をランダムに配置するという一定の法則性をもつ作品が確認できた。

このように対象作品は、同一開口部の単純な反復という指標には完全に合致しないものの、単純な反復への指向はうかがえると考える。

4. 装飾付加の忌避

「装飾付加の忌避」という指標については、9割以上（91.9％）の作品が該当した。加えて、装飾的な要素が採用されていた作品についても、それらはファサード全面に適用されるのではなく、部分的に使用されていたに過ぎない。つまりフィスカの作品は、「装飾付加の忌避」という点では、『インターナショナル・スタイル』において定位された「近代建築」と同質の性向を示していたと言えよう。

5. おわりに

以上の考察から、フィスカの作品が『インターナショナル・スタイル』において示された「近代建築」の造形的特性とは必ずしも合致しないことが明らかとなった。すなわち、本論考で第三の指標とした「装飾付加の忌避」についてはほぼすべての作品にその性向が確認できた一方で、「平滑な連続的壁面」及び「同一開口部の単純な反復」という指標に該当した作品は、わずか2、3割に留まっ

たことから、フィスカの作品は、厳密な意味で「インターナショナル・スタイル」としての「近代建築」の造形的特徴を有していたとは言いがたいものであった。さらに言うならば、フィスカの作品には、「インターナショナル・スタイル」の特質と、この「スタイル」に回収され得ない非西欧の特質が併存していたことが本論考によって明らかとなった。

本論考で考察対象としたフィスカの作品には、平滑な壁面による「家型」とも呼び得る造形的特徴を有する作品が散見された。これらの作品は、フィスカが学生時代に描いたスケッチ画に見られるデンマークの伝統的な建造物と酷似している。このことから、彼の作品に包含される非西欧の特質とは、フィスカにとっては身近なものであったデンマークにおける伝統的な建築に依拠するものであったことが示唆されるが、このことについては、さらなる考察が必要であることは言うまでもなく、今後の課題であると考えている。

- 1 Hitchcock, H.R. Johnson, P.: THE INTERNATIONAL STYLE, W.W.Norton & Company, INC, NY, 1966. / 『インターナショナル・スタイル』武澤秀一訳、鹿島出版会、1978
- 2 これまでの研究を通じて著者は、デンマーク近代建築の成立過程においては、他の北欧諸国に現れる建築の特徴が顕著には現れ出ていないことを明らかとしてきた。そこで本論考では、フランスやドイツを中心とした西欧型の近代建築との関係性を明確化することを目的に、その一つの様式化とも言い得る「インターナショナル・スタイル」の原理を基軸として、フィスカの作品の造形的特質について考察を試みた。
- 3 第三の原理「装飾付加の忌避」については、骨組み構造とは関係性を見いだせないことから、そのまま指標に適用した。
- 4 「準ずる」とは、壁面に様々な操作が確認できるが、基本的には壁は平滑な面で仕上げられているという特性を意味する。
- 5 これら11作品は指標に準ずる特性を持つ。